

<p style="text-align: center;">ドイツ文化論Ⅰ (German CultureⅠ) 〔 Deutsche KulturⅠ 〕</p>	<p style="text-align: center;">1 年 ・ 前期 ・ 2 単位 ・ 選択必修 3 専攻共通 ・ 担当 土屋 京子</p>	
	<p style="text-align: center;">〔システム創成工学教育プログラム 学習・教育目標〕 A－1（70％）、C－2（30％）</p>	<p style="text-align: center;">〔JABEE 基準〕 a, f</p>
<p>〔講義の目的〕 17 世紀から 18 世紀にかけて、西欧において成し遂げられたもっとも重要なことは、「自然哲学」を現代の「自然科学」へと変貌させたことでした。とりわけ、ガリレオの天文学、そしてニュートンの運動力学は、観察と分析を基に、世界の見方に変革をもたらしました。18 世紀には、このようなパラダイムの転換によって、人間の精神をも含めたあらゆる自然現象が、科学の対象になります。現代ではオカルトとして、学問分野ではまじめに扱われないような対象も、アカデミックな議論の俎上に載せられました。これらの問題は、啓蒙主義の主導国であったフランスの思想を受容した近代ドイツにおいて、文豪ゲーテを中心に、文学のモチーフとして扱われます。近代の自然科学とはいったいどのようなものか、また自然科学を基盤にしてなりたっている現代の社会はどうあるべきか、などといった問題について考えるために、ドイツの文人たちが残した自然科学に関するテキストを中心に、読みといてみましょう。</p>		
<p>〔講義の概要〕 基本的に毎回テーマに即したテキストを配布し、それらを中心に講義形式で授業を進めますが、補助教材として、適宜、映像資料なども紹介します。また興味を持ったテーマを各自で選択し、レポートを提出してもらいます。</p>		
<p>〔履修上の留意点〕 講義への積極的に取り組む姿勢を重視して、評価します。基本的に、ドイツ語の文献に関しては、日本語訳を参照します。ドイツ語の知識については問いません。</p>		
<p>〔到達目標〕</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 啓蒙主義時代から 19 世紀中ごろにかけてのドイツの思想、文学を学びます。 ・ 現代の科学技術のあり方について、各人の考えを深めます。 		
<p>〔自己学習〕 目標を達成するためには、授業以外にも関心のあるものを中心に、テーマを掘りさげて行ってください。また、レポート作成に際しては十分に下準備をしておいてください。質問等はいつでも受けつけま</p>		
<p>〔評価方法〕 提出物（50％）、授業での取り組み・積極性〔発言の有無、回数〕（50％）</p>		
<p>〔教科書・補助教材・参考書〕 教科書は使用しません。講義中に使用する文献や映像はこちらが準備、配布します。</p>		
<p>〔関連科目・学習指針〕</p>		

講義項目・内容

週数	講義項目	講義内容	自己評価*
第1週	ガイダンス	講義の概要、講義予定の説明	
第2週	ファウスト博士の伝説	ルネッサンス期に実在したファウストの伝説を紹介し、民衆本における主要なファウスト・モチーフの確認する。	
第3週	ファウスト博士の系譜	ゲーテ、クリングマン、トーマス・マン、手塚治虫などの、それぞれの時代で、それぞれの文人が描いたファウスト像を追いながら、人間の「知」に対する時代の見解を明らかにする。	
第4週	博物学の世紀	大航海時代以降、自然科学の母体となった博物学で活躍した地理学者 A.フンボルトや植物学者シャミッソーなどの文献を扱いつつ、彼らから影響を受けた作家の作品を読みとく。	
第5週	世界の複数性について	啓蒙思想家フォントネルが主張した「宇宙には地球以外にも生命が存在する」という地球外生命論をめぐるおこった議論と、これを題材にした文学作品を扱う。	
第6週	世界の成りたちー火成論と水成論	地質学の黎明期に唱えられた、二大地球観として、ヴェルナーの水成論とハuttonの火成論がある。これらの議論をめくりつつ、当時のドイツの文人が記した世界のなりたちを考察する。	
第7週	光学器と自然科学	ルネッサンス期に発明された光学器は、17世紀において、飛躍的に技術が進歩し、18世紀には市民の娯楽として身近なものとなった。これらの光学器の文化史を、文献からひもとく。	
第8週	人間とはなにか①ー動物に認識能力はあるか	「人間についての新しい学」を求めた啓蒙主義の学問の中心主題として、人間を特徴づけるものはなにかという問題はしばしば議論を紛糾させる種となった。まずは、思考能力「理性」と「悟性」が、その指針となるかどうかについての議論を扱う。	
第9週	人間とはなにか②ー言語起源論	第8週につづいて、動物と人間を分ける境界として考えられたが言語能力の起源について書かれた文献、ヘルダーの『言語起源論』を中心に、人間とはなにかについて考えてみる。	
第10週	人間とはなにか③ー人間機械論の思想と自動人形 (Automata) の夢	18世紀において流行した見世物市における自動人形と、その背景となった思想、そしてこれらをモチーフにした文学作品を扱う。	
第11週	動物磁気説	F.A. メスマーが提唱した動物磁気とは、世界には磁気が満ちており、人体にも影響を及ぼしているという考えであった。この思想を題材した文学の系譜を扱う。	
第12週	ゲーテの自然体験①	文豪として知られるゲーテが、実は当時の最先端の科学に通じていたことを、彼の記述した科学的資料と、当時執筆していた文学作品とを対照させながら、考察する。	
第13週	ゲーテの自然体験②	第12週に引き続き、科学者としてのゲーテについて理解を深める。	
第14週	ゲーテの自然体験③	第12、13週に引き続き、科学者としてのゲーテについて理解を深める。	
第15週	講義の総括	半期の講義を振り返るとともにディスカッション。	

* 4 : 完全に理解した, 3 : ほぼ理解した, 2 : やや理解できた, 1 : ほとんど理解できなかった, 0 : まったく理解できなかった。
(達成) (達成) (達成) (達成) (達成)